

長岡市立科学博物館 令和5年度 児童・生徒「昆虫標本展」

審査講評

審査長 胎内昆虫の家 館長 遠藤 正浩

越佐昆虫同好会会長 中野 潔

越佐昆虫同好会会員 榎並 晃

十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ 学芸員 加藤 大智

1 出品状況など

今年のお出品状況は小学校37点、中学校4点、小中共同で出品したものが1点、高校1点で合計43点でした。昨年の39点より増加し、地域別に見ても中越を中心にしつつ上越、新潟、阿賀野、新発田、佐渡など、広い地域から出品がありました。今後も県内の多くの地域からの出品があることを期待したいと思います。

内容やテーマも以前に比べると多様なものになったと思います。学校での指導のもとで標本づくりにチャレンジしたもの、初めての標本づくり、など初めて標本づくりに挑戦してみたものは、毎年のように見られるテーマです。また特定の地域の昆虫を集めたもの、昆虫のグループを絞ったもの（○○地域のチョウなど）も以前から見られるテーマで、一大勢力と言えます。それだけに、「多数の種類を集めた」「標本づくりの技術を極めた」「レポートが充実している」など他より抜きん出た特色がないと、他の人との差別化が難しくなっていると思います。漠然とテーマを決めてしまっている人は、もう一歩個性を出せないか工夫してみましよう。

そうした中でアリやハチ、ガなど一般には人気のない昆虫をテーマにしたもの、特定の環境に注目したものなど、他とは一味違ったテーマに取り組んで深く掘り下げた質の高い作品が見られたことは頼もしく感じました。

2 標本づくりについて

基本的なこと

標本づくりについては、守るべき基本的なことは毎年同じです。「データラベルに必要なことが書かれていて、虫体を刺した昆虫針と一緒に刺してある」標本として学術的に活用できる最低限のことがこれなのですが、今年も一部で、ラベルと標本が分けられているものが見られました。同じ出品者でも、ほとんどの標本は基本に沿っている中で、一部だけラベルが分けられているものもありました。多くの場合、見やすさを考えてのことなのだろうと思います。しかしその時に基本を忘れてしまうというのは、案外標本づくりの基本は意識せずに作っている人が多いということなのかもしれません。もう一度、標本を作る目的や、そのために守るべきルールを考えてみてほしいと思います。

その他

虫体の、針に刺す高さをそろえることが、意外に見過ごされがちです。特に位置が低すぎるものが目立ちます。平均台を使うか、なければ見た目だけでも高めの位置に揃えるとよいでしょう。

昆虫は種類が多く、区別が難しいものも多いので、同定間違いはある程度やむを得ない部分があると思います。しかし見た目が似ているというだけで安易に同定したな、と思える明らかな間違いがしばしば見られます。図鑑で調べる際は、写真を見るだけでなく、解説文に書かれている種の特徴や分布、類似種との識別ポイントも必ず読んでもらいたいと思います。

3 印象に残った作品

「漂着物の下に見られる昆虫～直海浜海岸での生息調査～」

1年近くにわたり、砂浜海岸の漂着物の下にいる昆虫をていねいに集めて調べた力作。昆虫のグループにこだわらず幅広く集めて調べた努力、標本として作り上げた努力ももちろん素晴らしいものですが、詳細にまとめられたレポートは疑問の部分も残しつつ読んでいて楽しく、持ち帰ってじっくり読みたいと思ったほどです。

「アリ標本図鑑 2023 種類別結婚飛行の時期の記録」

昨年に引き続き、アリの結婚飛行の時期を観察して、標本と共にレポートがまとめられており、目的意識のあるテーマの選定、長期にわたる調査、アリの種を同定する力、詳細にまとめられたレポートなど、質の高い資料として活用できるものだと思います。

「柏崎と柏崎周辺のチョウ 3rd season」

柏崎市や周辺のチョウを集め始めて3年目の記録。1年かけて集めた多数の美しい標本は圧巻の出来栄です。区別の難しい種もよく見分けられていると思います。賛否は有るかもしれませんが並べ方も個性的で美しいと思います。また同時に別の作品「ギフチョウの飼育記録 後編」もまとめていて、チョウへの興味の深さがうかがえます。

「ぼくのトンボコレクション シーズン3」

トンボの標本づくりを始めて3年目、まだ採集していないトンボを目標にした1年の採集結果がまとめられています。ハッチョウトンボ、マルタンヤンマを初めて採った感激が伝わってくるレポート、美しく作られた標本には感心しました。並べ方も個性的ですね。

「魚沼のトンボ～2年目～」

美しく、しっかり作られたトンボの標本が、流れのあるところ、ないところ、さらにその中できれいな川、用水路、田んぼなど細かい環境ごとに分けて並べてあり、タイトル以上にテ

一マがはっきりした、目的意識のある内容になっていることに感心しました。

「ちょうちょをくらべてみよう」

標本の数は少ないものの、大変美しく作られているのが印象的な作品でした。区別の難しいチョウどうしの見分け方を図に描いて説明したレポートもわかりやすく、見ていて楽しくなります。

4 注目すべき標本など

クロマダラタマムシは、2022年に新潟県で実に78年ぶりとなる再発見がありました（越佐昆虫同好会報第128号で発表されました）が、同じ人が今年も継続して採集したようです。今後も現地での発生状況のさらなる観察を期待します。

またラミーカミキリは長岡市では初めての発見となるものです。県内では近年急速に分布拡大をしている外来カミキリムシで、すでに上越市、柏崎市、小千谷市、魚沼市から見つかっています。今後も動向が注目されます。

他にも隣県で被害の出ている外来種のカミキリムシ（クビアカツヤカミキリ、ツヤハダゴマダラカミキリなど）が出品標本に含まれているのではないかとひそかに恐れていたのですが、幸いにも見つかりませんでした。いないに越したことはないものですが、見つけるなら早い方が対策も早く立てられます。注目していきましょう。

科学博物館 昆虫研究室より

今年もみなさんの熱意のこもった作品が数多く出品され、非常にうれしく思いました。出品数が増えると入賞は難しくなりますが、ここで身に着けた技術や経験は一生ものです。皆さんが互いに切磋琢磨して、着実にステップアップしてくれることを願っています。